

文苑

硯友會和歌（久保千尋大人選）

旅中月

くさまくらとけてねぬ夜の朝ほらけつれなく残る有明の月

松

露

後鳥羽院の御陵に詣でよ

すめらきのかしこきあともあれまして跡とふ人のなきそかなしき  
かしこくも心を隠岐のはるかにも跡を去のふの艸のつゆけさ  
かしこくも新嶋守とすめらきの心をれきのむかしうらめし

後醍醐天皇の御陵の跡にて

天の下去ろしめさせしすめらきのうつりましつる跡のかなしき

懷郷

袂

川

秋かせの身にしむたひに思ふかなわか父母の今はいかにと

秋月

はれくもりさためなき夜の浮雲をよそめなからにわたる月かも

紅葉

さよふかく降りし時雨にもみち葉の昨日の色をたどりける哉

折にふれて

是

空

秋の野になく轡虫さく時そこゝろの駒のなほくるひける  
 わが宿の桐のひと葉のちりしより夕風さむみ秋たちにけり  
 交机にさし入る窓の月影とともにもすみ行くすゝ虫のこゑ  
 すむ月にうかれ出てや我宿の垣根にすたく虫のこゑく  
 夜をふかみ虫の鳴く音を共として文よむ窓に月をてらせる

秋たかき頃隅田川の暮かゝる景色を思ひやりて

青

葉

汐みちて鐘の音遠くきこゆなりすみた川原の秋の夕暮

都の紅葉を思ひやりてよめる

ふくかせも肌にさむく覺ゆなりみやこそ秋のにしき織るらん  
 千草の花うつろひて虫の聲もまた絶えしに白菊のひとり  
 庭にさきそめしかば

わか宿の庭の白菊さきにけり鳴く虫の音はかれくにして

月五首

蝶

二

雲はらふ峰の松風こゑさえて光ほのかにもるゝ月影  
 夜をさむみねさめて聞けは有明の月の千里に衣うつなり  
 よもすからあまてる月の影さえてたもと露けさくさ枕かな

ともえ火の明石の浦の夕月にうたひてかへる海士の釣舟  
故さとはよもきか柚どあれはてゝ月より外にすむかけもなし

名所紅葉

はつ時雨ふりくるなへにもる山の木々の梢は色付にけり

明石の浦にて

あかしかた朝たつ霧のたえまより沖の釣ふねこきかへる見ゆ

秋はてし日よめる

木枯の音なつかしくなりにけり秋の日數もつきぬと思へは

初冬山

ちると見しもみちの夢をうつ山の山うつゝになして冬は來にけり

千

筏士

こりつみし後も櫻にまらなみの花をさかするせゝのいかたき

山家夢

夢ちにはみやこのゆきゝたえぬかなぬる間は山もうき世なるらん

甲越合戦

よをこめてたつ朝きりもなひきけりかひかねたるしふくとせしまに

楠正行

櫻井の露をふくみてみよし野に若木の花のまたかをりけり